風の末裔シリーズ・5th シーズンの5

# ～六連星・Ⅴ（むつらほし）～

©西風そら

http://nisikaze.sakura.ne.jp

## ～愁雨～

「戻りましたっ」
執務室の御簾を開けて、ユゥジーンが元気良く入って来た。
砂漠から帰還して一ヶ月と少し。季節はもうすっかり秋だ。
「降って来たか？」
長椅子で雨靴の手入れをしていたノスリが顔を上げた。
「ええ、降ったりやんだりですね」
こんなにはっきりしない長雨は、秋には珍しい。
空気も気分も湿りがちだが、こんな時こそ明るく振る舞うのが最年少の自分の役割だと、ユゥジーンは健気に心得ていた。
「報告書、報告書っと」
「お前はメゲないな」
大机のホルズが、いつもより濃密な報告書の束をチェックしながら、溜め息を付いた。
「まあ、気にしなきゃいいんです」
「そうか…」

執務室の仕事をこなす他の若い者達は、音をあげていた。
ここ何日か、用事で行った他部族で、皆一様に、理不尽な思いをさせられていたのだ。ユゥジーンが今日訪ねて行った棘の森の部族も、以前の親しみが失せ、冷たく素っ気なかった。
みんなあの渦巻きのせいだ。
ユゥジーン達が砂漠から戻って程なく、草原の様相が変わった。灰色の渦巻きの大きいのが、一度にあちこちに出現し、幾つかの部落が丸ごと呑まれた。
渦が去った後には、一見変わらぬ部落があったが、中身は変わり果てていた。普段は抑えていた負の感情が、いきなり表面に剥き出しになるのだ。小さな争いが重なって不審が広がり、荒れた空気は近隣の部族にも伝染する。
蒼の里は基本、草原の頂点に位置しているので、他部族と関わる事が多い。普段親しく付き合っていた者達が、どんどん豹変して行くのは、かなり堪(こた)える物で、皆、参ってしまっていた。

「戦や、目に見える抗争の方がマシだな」
ノスリは靴の紐を通しながら溜息した。誰も死傷していないし、一見何ら変わりない。でも、明らかに、侵略なのだ。
皆が欲を剥き出しにして勝手に動き、色んなバランスが狂って水や食料は片寄り、弱い者は窮しつつあった。
「ナーガ様は？」
「放牧場。里の結界を張り直している」

「また？」
「この里に渦巻きの侵入を許したら最後だからな」
「…最後……」
ユゥジーンは神妙に反復した。
皆が皆、奥の心だけになった自分勝手な世界。ヒトの本質ってそんなに情けないモノだったんだろうか？

雨音が激しくなり、シドが、上衣を頭から被って飛び込んで来た。
「さっきまで小降りだったのにぃ」
「おかえりなさい、シド。ホルズ様、俺、ナーガ様に雨衣を持って行きます」
雨衣を掴んで外へ出るユゥジーンを、シドが振り向いた。
「あっ、僕も行く」
二人は里の奥の放牧場まで、並んで歩いた。
「ね、シド、三峰はどうしているだろう？」
「僕達が立ち寄った時は大丈夫だったけれど、あっち方面にも渦が沢山出現しているんだよな」
「あの鷲羽のイフルートってヒトなら大丈夫だよね？　他の部落では、尊敬していたヒトが簡単に変貌しちゃってんだ」
「一見立派なヒトほど、自分を保つ為に、奥底に押し込めるモノが沢山あるのかもな。でも、イフルートはきっと大丈夫だよ」
「…うん…」
「ヤンとフウヤだっているじゃないか」
「うん、そうだね…」
話しているうちに放牧場に着いた。
土手を登ると、激しい雨にけぶる草原の真ん中に、ナーガが立っていた。呪文を結んでは空に送り出している。
「ナーガ様」
ユゥジーンがそっと近寄った。
「…あ、ああ、ユゥジーン…」
ナーガは髪に雨垂れをしとどおらせて、振り向いた。目の下に隈を作って、綺麗な顔が見る影もない。
「雨衣をお持ちしました。まだ掛かりますか？」
「え…？　ああ…、いつの間に、こんなに降っていたんだ？」
「……」
「今の呪文で終いだよ。ありがとう、ユゥジーン」
ナーガは雨衣を被って、二人と共に土手を登った。
頭上には、張ったばかりの結界が、珪砂(けいさ)のように広がっている。

「ナーガ様、僕、今日、風露の部落に寄ったんです」

シドの言葉に、ナーガは顔を上げた。
「通り道だったもんで、帰りがけに」
どうやらシドは、その話をする為に着いて来たようだ。
「風露は渦巻きの被害は受けていないんだろう?」
ナーガは冷静に言った。
「はい、まだ。ナーガ様の言っていたように、楽器造りに専心している職人達は、渦巻きの獲物にはならないのかもしれません」
「そう願いたい」
「ただ…」
「どうしたの?」
「楽器の注文が途絶えたと」
「…!」
「注文があった分も、ほとんど反故(ほご)にされていると」
「……」
「じゃあ、風露のヒト達は困るでしょ!」
ユゥジーンが声を高めた。
楽器を売る事だけが風露の収入源だ。食料や必需品は、楽器と交換で入手している。
世のヒトビトが、欲で即物的となり、音楽を欲しなくなったのか? 一体、世界はどうなって行くのだろう?
思い詰めた顔の二人に、ナーガは落ち着いて言った。
「食料は備蓄があるから暫くはやって行けるだろう。幸い山は実りの秋だ。サォ老師は柔軟な方だから、若い者達を食糧調達に山へやるかもしれない」
「でも、冬になったら?」
シドの心配に、ユゥジーンが口を挟んだ
「そうなったら、蒼の里から食料を回しましょう。俺、ちょっと位食べるのが減っても、平気です」
「ユゥジーン…」
ナーガは困ったように微笑んだ。
「この状態が続けば、窮する弱い部族が続出する。風露を当面だけ助けても、解決にはならない」
「でも…」
「そう…、やっぱり、当面だけ、渦を消しても……」
二人は耳を凝らしたが、ナーガは独り言のつもりだったらしく、それ以上は喋らなかった。
さすがに渦巻きの存在は里の皆も知る所となっているが、この期に及んでも、ナーガは黙していた。

＊＊＊

蒼の里の放牧地の近く、大きな杏の木の側に、ユゥジーンと、シド、ソラの暮らす、簡素なパォがあった。今はソラがいなく

て、シドと二人だ。冬の間はユゥジーン一人になる。
以前は西風の二人はナーガの家に居候していたが、ユゥジーンが独立した時、ついでに専用のパォを一つ設えたのだった。
外の雨音を聞きながら、ユゥジーンとシドはそれぞれの寝床に横になって、眠れないでいた。
「大長やカワセミさんはどうしているんだろう？　シド、何か聞いてる？」
「ううん」
ナーガはたまに渦巻きの発生現場に飛んで行くようだが、ノスリもホルズも、黙々と里の仕事をこなしていた。
ユゥジーンが何か聞こうとすると、ホルズにもぐら叩きのように遮られて怒られる。ホルズだって父親のノスリに何も聞かされないのは不満なのだが、あのヒトは父よりナーガより、大長が絶対なのだ。そういう時代に育ったヒトだから。
ユゥジーンには、大長様とかカワセミ様とか、どんだけ偉大なのか分かんないけれど、とにかく今の、明らかに落ちて行っている状況が嫌だった。皆で力を合わせて立ち向かうべきなんだろうに、何でいまだに隠す事があるんだろう？
大長は、ナーガ様はヒトの心を怖がっていると言っていた。俺達、執務室のメンバーも怖いんだろうか…？
シドも蒼の里で決まった事には従う姿勢を貫く感じだったので、ユゥジーンは話題を変えた。
「ナーガ様も、たまには私事で風露に行けばいいのに。以前みたいに休みを取って」
「あのヒト、生真面目だからね。草原の大事な時に、自分の為には一歩も動いちゃ駄目…って感じ」
「ねえ、シド、ナーガ様はそれでいいかもしれないけれど、フウリさんは心細いだろ？。もうすぐ生まれ月だし」
「そうだな…」
「例え風露は渦の被害を受けないとしても、世の中がこんな時に、頼りのヒトが顔も見せてくれないなんて、自分は愛されていないんじゃないかって、不安になるよ」
「随分ませた事言うようになったな、ジュジュ」
「茶化さないでよ。俺、真面目に心配してんの」
ユゥジーンは口を尖らせてゴロンと転がった。
「心配は僕だってしているさ。だから今日、大回りして風露の様子を見て来たんだ」
「…大回り…したの…」
「ちょっとでも不安要素があれば、ナーガ様が風露に行く口実が出来ると思ったんだけれど。でも、楽器の注文が途切れた位じゃ、駄目だったな」

「シド…」
ユゥジーンは、艶やかな飴色の肌のシドの方へ顔を向けた。
子供の頃からナーガに並々ならぬ世話になっていたという彼は、掛け値無しにナーガにおもねている。こうして毎年夏に遥々(はるばる)手伝いに来るのも、眷族の助け合いっていうより、ナーガの助けになりたいんだろう。
「そうだね。シドがこんなに心配してんだからねえ」
「僕はいいよ。おかしな事するなよ」
「分かってるよ。こんな時に…幾ら何でも、その位の分別はあるよ」
ユゥジーンは更にゴロゴロ転がった。自分みたいなガキンチョ、分別を外れないと何も出来ない…。
雨足が早くなった。
この時期に、草原に一度にこんなに雨が降る事は珍しい。空も、地上の影響を受けて、歪んじゃってるみたいだ……。
＊＊＊
『あっち側』の空間にだって、雨は降る。
地上みたいにザアザア降らず、所々滝のように固まって、ドシャアッと落ちて来る。落ちて来た水は地面を流れず、そのままどこかへ通り抜けて行く。
「一体どういう仕組みなのかしら?」
白蓬のお腹の下で、リリはシンリィと、寝転がって滝の流れを眺めていた。ここの所、オーバーワークでへとへとだ。
「ねぇ、しんりぃ、あんたが喋らないのは慣れたけれど、あんたの気持ちを分かるのに、ちょっと時間が掛かるのが珠に傷だわねぇ」
リリは勝手にお喋りしながら、毛糸の紐を髪に編み込んでいた。カワセミに『バクハツ頭』って言われたのをそれなりに気にしていたら、大長がどこからか調達して来てくれたのだ。自分の前髪よりやや赤めの紫が、けっこう気に入りだった。
外の世界は夜中なんだが、ここではどんなに夜更かししても誰にも叱られない。まあ、渦巻きは昼夜関係ないんだけれど。
一人でお喋りするのにも慣れた。シンリィがまったく聞いていないって訳でもないのが分かって来たからだ。
シンリィがピクリと動いて、身を起こした。
「出動?」
どこかで歪みの渦が地上に吐き出されるのを察知したのだ。
胸に下げた半透明の石を握って目を閉じる。これでカワセミに伝わる。後は大長が自分達の気配を血で察知して、ジェット気流で追い掛けて来るのだ。
二人は素早く白蓬に跨がった。シンリィが察知した渦の方向

へ馬を向け、そして一跳びする。

「あれ？　じじさま？」

低山の連なる丘陵地帯、水底の歪みの向こうの地上に、リリは人影を見た。いつもは自分達の方が先に着くのに。

「あっ…」

じじさまかと思ったら、雨衣のフードから滴をしとどおらせたナーガだった。

「…とおさま」

今まさに雨雲の中から、歪みが渦巻きながら出現した所だった。丘の頂上に立つナーガは、こちらを正確に見据えて、剣を抜いている。

シンリィもそれに併せて、指を組んで術を構えた。リリも慌てて、補助の呪文を唱えた。

じじさまやかーたんより頼りないけれど、真っ直ぐな翡翠の光が届き、灰色の渦巻きは誕生するや否や消滅した。

リリは地上に佇むナーガを見た。このヒトも、渦巻きと闘う一人なんだよね…。

「？？」

そのナーガが、こちらを見て、手招きしている。

「しんりぃ、どうしよう…」

リリは眉を八の字にして、相方を振り向いた。しかし、シンリィは白蓬のお腹の下に潜り込み、コロンと横になってしまった。

「もぉっ！　マイペースなんだから！」

リリはもう一度ナーガを見た。相変わらず手招きしている。

「…もぉ…！」

雨にけぶる頂に、波紋の丸窓が開いて、紫の前髪の女の子がポンと出て来た。

「やあ、リリ、久し振り」

「……何かご用？」

リリはわざとそっけなく言った。大きくなったねとか言われるのは、うんざりなのだ。

「うん、手伝って貰おうと思って」

「は？　何を？」

「これこれ」

長い髪の妖精は、地面から何か拾い上げてリリに差し出した。

「へ？」

リリはつい近寄って、手を出してしまった。掌に乗せられたのは、小指の爪よりも小さい赤い実。

「何、これ？」

「苔桃(コケモモ)っていうんだ。風露の山にはないだろう？食べてごらん」
そう言って、ナーガは実をひとつ、自分の口に入れて見せた。
「……」
リリも恐る恐る、渡された実を噛んでみた。
「・ゔ！　す・っ・ぱ・い・・！」
「あはは、すっぱいだろ！」
「もお！　すっぱい！　すっぱい！」
ナーガは笑って、自分の雨衣をリリに被せた。
「手伝っておくれ。小さいから集めるの大変なんだ」
「どうすんの？　こんなすっぱいの」
リリは眉間にシワを寄せて聞いた。
「うん、潰して煮込んで蜂蜜沢山入れてジャムにするの。だから鍋一杯分要るんだ」
「……」
リリは無言で屈んで、足元の草の中から赤い実を採り始めた。
何やってんだろ、このヒト…。
何やってんだろ、あたし……。
「苔桃採りに来たら、いきなり渦巻きが現れてビックリしたよ」
ナーガは布袋の口を開けて、こちらに向けながら言った。リリは手一杯になった赤い実をそこへ放り入れた。こんな夜明け前に、雨の中、苔桃採ってる長さま……。
「呑気ね…」
ポツンと言ってしまった。
だって、しんりぃは術を使う度に疲れて寝ちゃうし、かわせみさんもボロボロで、もうずっとヘタレてんのに。
ナーガは聞こえなかったように、黙々と実を摘み続けた。
「うん、もういいだろう」
赤い実が袋一杯になった。それを馬の鞍袋に入れるナーガの後ろ姿に、リリは思わず叫んだ。
「ねぇ、蒼のよーせいの長さまなら、こんなの誰かに命令してやらせればいいじゃない。何で、こんな雨の夜に一人で、こんなコトやってんのよ！」
「わあ！」
振り向いたナーガは、目がキラキラしていた。
「初めて一杯喋ってくれた！」
「〜〜〜〜〜・・・!!」
リリは口の両端がへの字に下がった。
だからヤなんだ！　話するの…。
雨衣を急いで脱いでナーガに押し付け、膨れっ面をしたまま丸窓に飛び込んだ。

「有り難うね、リリ。その髪の毛糸、可愛いよ」
「知らない！」
歪みの世界へ戻ると、シンリィが起きていた。リリを見て、寝惚けマナコで首を傾げている。
「しんりぃは、とおさまのコト好き？　あたし、分かんない」

＊＊＊

秋に色付く森の風穴。大長とカワセミの根城の一つだ。
リリが、大長の横で寝っ転がって、毛糸で綾取りをしている。昼間も渦巻きを三つもやっつけて、くたびれたシンリィが寝ちゃったので、退屈潰しにここへ来たのだ。
カワセミはいなかった。大長によると、カワセミ独自の回復パワースポットがあるらしい。

リリは、今朝方ナーガに会った話を、ブツブツ喋っていた。
「ホント、とおさまって呑気。蒼のよーせいの長さまってあれで務まるの？」
「ああ、ふふ…、そのハズし加減がナーガの良い所なんですよ」
「ええ～」
風穴の外では雨が上がりかけて、夕暮れの薄日が射している。
リリは綾取りに飽きて、毛糸を髪に巻き付けた。
「ねえ、灰色の渦巻きをチマチマ倒してるより、渦巻きを生み出す悪い奴をやっつけに行こうよ」
「うーん…」
大長は眉を寄せて、困った顔をした。
「出来れば関わりたくない相手でしてね」
「でも、やっつけなきゃ渦は治まらないんでしょう？」
「争う相手ではない筈なんです。どちらかの滅びに繋がる」
「……？」
「向こうもそれは分かっている。だから蒼の里には正面切って喧嘩を売って来ないんです。私達が蒼の一族から離れて、個人として動いているのはその為なんです」
「ふうん？」
リリにはイマイチ分からなかった。こんな意地悪な渦を生み出す悪い奴なんか、滅ぼしちゃってもいいんじゃないの？。
「こうやって地道に叩いて、こちらの強い意志を表して、諦めてくれれば、お互いにいいんですけれどね」
「お互いに？　向こうは悪いヤツなのに？」
大長はちょっと姿勢を正してリリに正面向いた。
「リリ、ねぇ、何が良いとか、悪いとか、世界の一部でしかない私達が、勝手に決め付けちゃイケナイんですよ」
「…？？　んーと…？」
「例えばね、リリがお腹が痛くなった。でも、だからといって、

痛いお腹を切って捨てる訳には行かないでしょう?」
「ひえぇ、嫌だ!」
「だってそれは、冷たい物を食べ過ぎたリリがいけないんです。お腹は痛くなって、リリに『それは身体によくないよ』って教えてくれているんです」
「ん〜ん・・」
「そしたら、リリはもう食べ過ぎたりしないでしょう?。そうやって学んで成長する為に、世界には良いも悪いも満ち溢れているのですよ」
「ふぅぅん…。だったら、この意地悪な灰色の渦巻きも、必要なモノなの? 世の中のヒトをペンッして回ってるの?」
「そうかもしれませんね…」
リリの言い方が可笑しくて、大長はちょっと微笑んだ。

「でも、皆が気が付くの、間に合わないよぉ。川は塞き止めちゃうし、森は壊しちゃうし…」
「そう、皆が気付くのを待っていたら、大地が枯渇してしまう。その為に蒼の一族がいるのです」
「へぇ??」
「世の生き物達は、自ら運命を切り開き、前へ進もうとする。でも時々、道を誤る。それを見付けて判断し、引き返せる方向へ風を流すのが、蒼の妖精の役割です。その為に、我々は多くの寿命を頂いているのですよ」
「ふうん」
リリは立ち上がって後ろ手を組み、クルリと回った。
「蒼のよーせいの長さまなんて、皆の上で偉そうにふんぞり返ってるモンだと思ってた」
「そう出来たら楽チンなんですけれどね」
大長は苦笑いした。
「何も考えず、ただ日々を紡ぐだけなら、私達の寿命をはもっと短くなるでしょう」
「そなの?」
「長く生きる者は、それだけの知識と知恵を得ます。世界の流れを見つめ、判断する知識、対処する知恵。それは、個人の物のようで、実は皆の物です。皆の為に使わねばならないんですよ。それが摂理です」
「ん……と…?」
「リリはちょっと教えただけで、すぐに術が使えるようになったでしょう?。それは、リリがやっぱり、そういう存在だからです」
「……分かんない…」
機嫌よく聞いていたのに、話がそっちの方へ向かって、リリ

は頬を膨らませて無口になった。
「分かる時に自然に分かりますから、今のリリのままでいいんですよ」
「でも、『そういう存在』になっちゃったら、るうしぇるみたいに結婚相手も自分で選べないんでしょ？」
「リリ、そんな事ないですよ。ルウも、結局は行くべきヒトの所へ行ったでしょう」
「あたしは分かんないよ。るうみたいに、助けてくれるトモダチいないもん！」
リリは叫んで丸窓に飛び込み、シュルンと閉じてしまった。
困った顔の大長が残る。
「……頑固で、一途で…、物事を考え過ぎちゃうのは、ナーガそっくりですねぇ…」

＊＊＊

風穴を後にして、リリは歪んだ空間をほっつき歩いていた。
慣れれば大して怖くない。この水中みたいな重ったるい空気も、体重を軽くしてくれる物だと割り切れば、返って動きやすかった。あちこちの歪みの薄い所から見える景色は結構面白い。下の方に空があったり、天井に山があったりする。
しかし、面白くない物を見付けてしまった。
ちょっと先に小さい渦巻きが出来て、地上に雫みたいに落ちようとしていた。こんなのはしょっちゅうなので、しんりぃもたまに見落とす。
「何かを狙った渦巻きかしら…、あっ！」
渦巻きの真下を馬で飛んでいるのは、よくゆぅじんと一緒にいるヒトだ。
「ねえ！　あんた!!」
空に窓を開けて大声で叫んだ。でも、気付いて貰えない。
「もう…!!」
リリはそのヒトの進行方向に先回りして穴を開け、馬のお尻に飛び降りるタイミングで跳んだ。
しかし、馬上のヒトは、渦巻きに気付いて馬を急停止させた。
「きゃあぁー!!」
空振りしたリリは、馬の手前に落っこちた。灰色の空間に慣れて、外の重力を忘れていたのだ。あんまりだわ!!
稲妻のように馬が急降下して、気が付くとリリは小脇に抱えられていた。
「はうぅ…」
「大丈夫？　一体どこから落っこちて来たの？」
飴色の肌のそのヒトは、狐につままれた顔をしながら、リリを後ろに乗せてくれた。

「あんたが急に止まるから……あっ！」
渦巻きがすぐ上に迫って来ている。
「あんた！　破邪の呪文を！」
「僕には無理。しっかり捕まってて」
「え？　きゃあっ！」
青毛の馬は渦を避けて急加速し、ジグザグに逃げた。リリは吹っ飛ばされないように必死でしがみつかねばならなかった。
程なく、渦は馬を見失って、追って来るのをやめた。
「スゴいね、あんた…、えと…」
「シドだよ」
「あたし…」
「リリだろ？　一目で分かった」
「…とおさまに、聞いてるの？」
「ユゥジーンに聞いていた。逢えて嬉しいよ」
「うん…。ね、草の馬じゃないよね、この馬。なのに、しんりぃよか全然早い。スゴイ、スゴイ！」
「はは、どうも。飛び方はユーフィさん直伝だからね」
「ゆーふぃ？」
「シンリィのお母さん…」
「ふうん、蒼の里にいるの？」
「・・・　リリ…、君、ナーガ様と家族の話とかしないの？」
シドの口振りが何だか怒っているみたいで、リリは嫌な気分になった。
「…とおさまとはあんまり話しない…」
「そう…」
「いけない？」
リリは不機嫌さを声に出した。
「ん？　いや、いけないって事じゃないけれど…。リリが聞いてくれたら、僕が何でも教えてあげるよ」
「いい、どうせ、蒼の里なんか行かないモン！」
シドもやっぱり驚いた目を見開いた。でも、すぐに静かな顔になった。
「そっか…」
「怒んないの？」
「いや、何となく分かるから…」
「分かるって、なんで?!」
「ルウ様にもそんな時期があった」
「…ああ…そうなの…」
遠目にさっきの渦巻きがゆっくり消えて行くのが見えた。
しんりぃが起き出して、じじさまと片付けたんだわ。
「あたし、そろそろ戻んなきゃ。ね、さっきあたしが出て来た

所へ引き返してくれない？　あっち側との通路は、こっちからじゃ開けられないの」
「ふうん、そういうモノなの？」
「うん、開けるのも閉じるのもあっち。だからしんりぃはあっちから出ないの。うっかり戻り損ねたら、二度とあっち側へ行けなくなるから」
「そう……」
　シドは言葉を途切れさせて、馬を返した。シンリィが姿を消していた理由が分かった。ずっと背中合わせの別世界にいたんだな…。

「あ、あそこ！　あの穴ボコだよ」
　リリの指差す空の一角に、丸窓が不自然に浮かんでいた。
「じゃあね」
「うん、…あ、そうだ！　ちょっと待って！」
　シドが鞍袋から、蝋封された小瓶を取り出した。
「エノシラに頼まれた届け物なんだけれど…、二つあるから、一個はリリとシンリィにあげてもいいだろ」
「なあに？」
　リリは目を輝かせた。封はされているけれど、その瓶から、唾が溜まりそうな甘い匂いが立ち昇っている。
「苔桃のジャム。知ってる？　コ・ケ・モ・モ」
「……」
　リリは手を引っ込めた。
「どうしたの？　エノシラの作るジャムは絶品なんだよ」
「そのエノシラってヒトは、何処からコケモモを手に入れたの？」
「え？　さあ…？　何処かの山へ行って採って来たんじゃないかな」
「……」
「すっぱいのが身体に良いんだ。妊婦さんにいいから、フウリさんにって。エノシラって、そういう所、とっても気が利く娘なんだよ」
「……」
　リリは手を引っ込めたまま黙っていた。
「どうしたの？　大丈夫だよ。エノシラも君にあげたって聞いたら喜ぶよ」
「……いい。身体に良いってんなら、二つともかあさまに…」
　俯(うつむ)いて呟くリリの後ろから、すっと手が伸びた。
　目の前のシドの目が輝く。
「シンリィ!!」
　リリの後ろの丸窓越しに、いつの間にかやって来た緋色の羽

根の少年が、両手を差し出して、勝手にジャムの瓶を受け取ってしまった。
「シンリィ、元気か？」
満面の笑みのシドに、シンリィも片エクボを作って微笑んだ。
「エノシラが作ったんだよ」
少年は目を閉じて瓶に鼻をくっ付けた。
「もぉ…、しんりぃったら…」
リリは呆れて肩を竦(すく)めたが、気を取り直してシドに手を突き出した。
「もう一つも渡して」
「えっ？」
「あたしが風露に届けるわ。あっち側からの方が近いから」
「あっ…そう？　じゃあ頼むね」
「ついでに、かあさまと『家族の話』でもして来る…」
遠くの山ではまだ雨が降っている。でも反対側の空には、黒い雲の間に久し振りの夕焼け茜が覗いていた。

## ～星の雫～

黄金(こがね)の波打つ草原。
馬を引いて歩く、一人の少年がいた。ただひたすら北を目指して…。
「疲れたか？」
立ち止まってしまった馬を労うにも、もう麦がない。ここへ来るまで通過した部落で、宿や食料を分けてくれる者はいなかった。
貧に窮している訳でもない。皆、裕福に持ち合わせてはいた。ただ、助け合い分け与える心をなくしてしまっているだけだ。
「この世界、どうなっちまうんだろうな…」
赤っぽい黒髪の前髪を掻き上げて、ヤンは空を見上げた。
日に何度も空を横切る灰色の渦巻き。フウヤの言ったように、大長やカワセミが手が回らない程、歪みが広がってしまっているんだろうか？　地上の小さいモノにはどうしようもない、強大な力…。
〈そうだよ、なのにお前、何一人でしんどい思いしてんの？〉
隣を自分が歩いている。
いつの間に、周囲が灰色に澱(よど)んでいた。
〈欲に身を任せちまえば楽だぞ。皆そうなんだ。一人だけ突っ張るのに意味なんか無いって〉
「まだそんな心が僕の中に残っているのか…」
ヤンはうんざりして溜め息を付いた。
「なあ、じゃあ、フウヤは好きじゃないのか？」

思わぬ問いかけに、マボロシはぐっと詰まった。
〈す、好きだよ？。あいつとずっと一緒にいたい。あいつが笑うと気分いいわな〉
少年は喉でクックと笑った。
「安心した。だから僕は進んでいるんじゃないか。もう失せろ」
マボロシは灰色と共に消えた。
ヤンはもう迷わなかった。フウヤが自分の心の中に、生涯消えない鋼の芯を通してくれた。

「この辺りの筈なんだけれど…」
イフルートに借りた地図を開いた。彼と仲のよいソラが、以前、赤く印をしてくれた、蒼の里の位置。
「結界に守られていて、目に見えないんだったな」
今は世界が歪みに覆われてるから、結界を更に強くしているかもしれない。
前方に小高い丘があるのが見えた。
斜面はハイマツの幹が絡んでいたので、馬は待たせて一人で登った。天辺(てっぺん)から周囲を見回したが、背の高い草がうねるばかりだ。
「ふう…」
少年は疲れて座り込んだ。陽が落ちる前に、今夜の寝ぐらを探さなくっちゃ…。
「ダメダメ、こんなんでメゲてたら、フウヤに笑われる」
ヤンは立ち上がり、思い切り指笛を吹いた。
――ヒュ――ィ――
高い音は草原に吸い込まれて行った。ユゥジーンの耳にでも届けば…と思ったのだが、そう都合よくは行かないようだ。
「ふう…さてと…」
立ち上がって振り向いて飛び上がった。
全く何の気配もなく、そこに一人の男性が耳を押さえてうずくまっていたのだ。
「ピーピーうるさい…！　鼓膜が破れるかと思った」
男性は薄い水色の髪をかき上げて、ヤンを睨んだ。
「カ、カ……、カワセミさん!!」

「ん…？」
カワセミは呆けた顔をして、身を起こした。顔色が悪く目が落ち窪んでいる。うずくまっていた身体の下に、二つ積まれた玉石があった。
「ああ、三峰の…。今日は一人か？　あのケセランパサランみたいなのは？」
「えと、フウヤですか？　…あの…」

口ごもるヤンに、カワセミは額を曇らせた。
「…どうした、まさか、灰色の渦にやられちまったか?」
「いいえ、フウヤはあんなのにやられません。でも、怪我したんです」
「怪我?」
「かなりの失血をして、ずっと意識が戻らないんです。うわ言で『お姉ちゃん、お姉ちゃん…』って」
「……」
「フウヤが身内の事を口にするの、初めて聞いた。だから僕、その『お姉ちゃん』を連れて来たら意識が戻るんじゃないかって思ったんです。ナーガってヒトに頼もうと…」
「……待ってろ」
水色の妖精は、左手の指を二本、額に当てた。
数秒その形でいたが、すぐにフッと項垂れて、玉石の上にしなだれ倒れた。
「あの、大丈夫ですか?」
「ボクに構うな…。ちょっと、休みに来ただけだ」
「ここで…?」
「……」
「あの……」
「…来たぞ…」

ヤンが目を上げると、すぐ向こうの草原すれすれに、草の馬が飛んで来る。恰幅のいい馬に、恰幅のいい蒼の妖精が乗っていた。
「…あ…」
目を戻すと、玉石の所にもう、カワセミの姿はなかった。

執務室の長椅子で、ヤンはかしこまって座っていた。下の方の馬繋ぎ場では、ヤンの四泊流星が燕麦をむさぼっている。
奥の大きな机の向こうで、さっきの男性が、緑色の石板を眺めてブツブツ言っている。
「《ハイマツの丘に賓客》…だと? 何かと思って泡食って駆け付けたら、やせっぽちの小僧が一人。まったく人騒がせな」
「あの、僕…」
「ああ、気にすんな。あのオッサンに振り回されるのには慣れてる。まあ、座ってろ。お前さんだって疲れているだろう」
こちらの事情は一通り伝えたが、このヒトは窓から鷹を二羽放って、後はドッカと座ったきりだ。
「場所だけ教えてくれれば、僕、一人でフウヤのお姉ちゃんの所に行きます」
「お前さん一人じゃ、フウリに会うことも出来まい」
「えっ?」

「まあ待ってろ。風露のラゥ老師に鷹の手紙を届けた。折り返し返事が来る」
「・・・・!」
ヤンはちょっとイラついた。
何なんだろう？　この悠長さは？　フウリってヒトを直接連れに行けばいいじゃないか。
「ヤン!!」
飴色の肌の青年が飛び込んで来た。
「君は、神出鬼没だな」
「シド…!!」
知った顔に会って、ヤンが泣きそうになった所に、羽音高く鷹が飛び込んで来た。
＊＊＊
「ほい、手紙だ」
ホルズが窓から鷹を迎えた。
「何て…?!」
ヤンは立ち上がって駆け寄った。しかし、風露の文字はヤンには読めない。
「あー・・」
ホルズは言いにくそうに詰まりながら読んだ。
「その……フウヤが怪我をした事は気の毒だった。養生して早くよくなるように……って感じの事が書いてある」
「フウリは？　フウヤのお姉ちゃんは？」
「フウリには知らせないと……ラゥ老師の判断だ」
「・・!!」
ヤンは音を立てて立ち上がった。こんな連中に任せておけない。
「ヤン、フウリは身重なんだ、もうすぐ臨月なんだよ。ラゥ老師の判断は間違っちゃいない」
シドが心痛そうに慰めた。
「で、でも、せめてお姉さんの言葉だけでもっ」
「フウヤは、風露の部落を出た者なんだ。あの部落は、そういうの、厳しいんだよ」
「そんな…」
「だから最初、僕達に素性を偽っていたんだろ？」
「……」
ホルズも大机の向こうから回って来て、項垂れる少年の肩に手をおいた。
「種族によって掟は千差万別なんだ。蒼の里だってその部落での決まり事には口出し出来ない。西風の里の事もそうだったろう？。まして、風露はかなり特殊なんだ」
「でも、でも…！　フウヤは怪我して苦しんで、お姉ちゃんの

名前を呼んでるんだ！　それを、部落を出た者だから関係ないって?!」
　蒼の里に来れば、凄い大人達が何とかしてくれると思っていた。こんなに融通が効かないなんて…！
「失礼しまーす!!」
　御簾が跳ね上がって、大きな篭(かご)を抱えた三つ編みの女性が、勢いよく入って来た。
「ホルズ様、ご要望の精が付いて消化のよい食べ物です。後、着替え。ああ、ジーンので丁度よかったわね。凄い匂い。洗っちゃうから早く脱いで脱いで」
「えっ？　えっ？　僕?!」
「貴方以外の誰だっていうの？　シドさん、脱がせるの手伝って下さい」
「よし来た」
「ややややめて下さい！」
　妙齢の女性にいきなりズボンに手を掛けられて、ヤンは慌てて後退りした。
「嫌なら自分でお脱ぎなさい」
「ぼっ僕、洗濯なんかいいです！」
「貴方はそう思っていても、そんなでんでろりんな格好をしていたら、何とかしてあげなきゃって思うの」
「そんなのあんたの勝手だ！」
「じゃあ、フウヤは貴方に、身重のお姉ちゃんに心配させに行って欲しいって思っているかしら？」
「…!!」
　ヤンは衝撃顔になって止まった。
「ごめんなさいね、入って来るタイミングを逃して、外で聞いちゃったの」
「フウヤ……」
　ヤンは、張り詰めていた何かが切れるのを感じた。そうだ、フウヤは無鉄砲なようで、いつだってヒトの身になって考えていた…。
「僕……余計なお節介だったのか…」
　小さい声で呟いて椅子にヘタリ込んでしまった少年の前に、女性は篭から暖かい料理を出して並べた。
「ううん、貴方のやった事、ちっとも余計な事じゃないわよ」
「そんな気休め…いいです…」
「気休めじゃないわ。自分の気持ちに自信を持ってね。心を込めて行動していれば、遠回しでもきっと実を結ぶのよ。あたしはエノシラ。貴方の事、好きよ。シドさん、後で取りに来るから、この子、着替えさせてあげて下さいね」

「ああ、分かった」
女性は小さくお辞儀して出て行った。
入れ違いに、ユゥジーンが入って来た。
「え？　驚くヒトって誰？　エノシラ母さん。…わお、ヤン!!こりゃ確かに驚いた!!」
「ユゥジーン～～」
同年代の心ほぐれる友人の登場に、打ちひしがれていたヤンは思わず情けない声を出した。大人は自分を構ってはくれるが、やっぱり大人なんだもん。

ユゥジーンに勧められて、着替えて料理を口にした所で、やっとナーガが、ノスリと共に戻って来た。
「フウヤのお義兄さん!!」
ヤンは急(せ)いて立ち上がった。
「待て、まあ待て」
ホルズってヒトが、また悠長にのったりと、ナーガに説明を始めた。ヤンはイライラしたけれど、ユゥジーンを困らせてもイケナイと思って、我慢して待った。
「ああ…うん」
このナーガってヒトも、気が遠くなる程呑気だった。
「ヤン…だっけ。遠路ご苦労様。今日はゆっくり休みなさい。ユゥジーン、ソラのベッドを使わせてあげて」
「はい」
「あ、あの…!!」
「ヤン、行こう」
ユゥジーンに引っ張られて、ヤンは口をパクパクさせながら、執務室を後にした。
御簾を降ろし際に、大人達が大きな地図を広げて、額を付き合わすのが見えた。そりゃ、確かに、今は世の中の一大事だ。フウヤが怪我したのなんて、些細な事なんだろう…。
「ユゥジーン…」
ヤンはガックリ肩を落とした。
彼の誇りにしている一族を悪く言いたくはないけれど、一言ぐらい愚痴を言ってもいいだろ？

「俺の馬は二人乗りまでなら飛べるんだ。ちょっと速度が落ちるけど」
前を歩くユゥジーンがボソッと言った。
「えっ？」
「いいから、早く歩け。ナーガ様は勘がいいんだ」
ユゥジーンはサクサクと里の奥へ向けて歩き、途中でクルリと向きを変えて小道へ入った。

「風露の部落なら、夜の間に往復出来る」
「ユゥジーン?」
「入り口の関なんか通すと、絶対取り次いで貰えないけれど、俺、幸いフウリさんの住む塔を知っているんだ」
「でっ、でも、フウリさん、身重なんだろ? 三峰には連れて行けないよね?」
「フウリさんの所にいい物があるんだ。ヒトの姿を真似してメッセージを伝えてくれる魔法の人形。これくらいの」
ユゥジーンは両手を併せて拳ほどの大きさを示した。
「それにフウリさんの姿を移して三峰に持って帰れば、フウヤをお姉ちゃんに会わせてあげられるよ」
「ホント?!」
二人は明かりの付いている窓の下を、身体を低くして潜(くぐ)って、厩の裏に辿り着いた。
ユゥジーンの馬は幸い端っこの方に繋がれていた。
「こっちこっち…。放牧場の方から飛び立と・・・」
不意に、後ろから首根っこを掴まれた。

＊＊＊

二人の少年を後ろから捕まえたのは、怖い顔をしたエノシラだった。
「やっぱり来た!」
「エ、エノシラ母さん…!」
「ジーン、貴方の行動なんてお見通しよ」
「見逃して…」
「どうかしらね」
「お、お願いします!」
ヤンも掴まれたまま懇願した。
「一つ聞く事があるわ」
エノシラは二人を離して腕組みした。
「お腹に赤ちゃんがいる女性の身心がどれ程デリケートか、解ってる? 藁灰(わらはい)よりも脆(もろ)いのよ」
「……」
「……」
「ふう…、貴方達、自分の友達の事だけ考えていたら駄目。大人のヒトはね、物を見る範囲が広いから、迂闊に動けないの。それを解りなさい」
「……うん…」
「……はい…」
「言葉をソフトに、時には嘘も必要よ。禁句は『意識がなくて危ない』とか『うわ言でお姉ちゃんを呼んでた』とかよ」
「えっ?」
「いいの? 行っても」

「考えて動けない大人と、考えるより先に動く子供がいて、世の中上手く回っているのよ。私は今から十秒、後ろを向いているわ」
エノシラはそう言うと、クルリと向きを変えた。
「あ、ありがとう、母さん」
「有難うございます！」

エノシラがきっちり十秒経って振り向くと、もうユゥジーンの厩は空だった。染々(しみじみ)した気分になって、何となく寝藁を一本つまみ上げた。
「いい子…ヒトの気持ちを考える、本当に優しい子になってくれた」
初めて会った日、厩でシンリィを押さえ付けて羽根を引っ張っていた乱暴な子だった。
「心を込めて行動していれば、遠回りでも実を結ぶって…、本当なんですね…」
エノシラはまだ明かりの灯っている執務室の方を見やった。あの子供達の未来を守る為、身心削って飛び回るヒト達がいる。その側で、自分は自分に出来る事を、心を込めてやっていよう。

星ひとつない夜闇の空を、ユゥジーンは身体の中の羅針盤を頼りに飛んでいた。
上も下もない真っ暗闇。でも後ろのヤンは、そんなに怖いと思っていなかった。蒼の里へ来て、短い間に何だか色んな事を知った気がする。
「ユゥジーンのお母さん、素敵なヒトだね。随分若く見えるし」
「あ、うん、俺を生んだ母親とは違うんだよ」
「えっ？　そうなの？」
「俺、両親とも黒死病で亡くしたから…」
「…あ……」
黙ってしまったヤンに、ユゥジーンは急いで繕(つくろ)うように言った。
「おんなじような子供は一杯いたから。エノシラ母さんは皆のお袋さんなんだ」
「…そう…」
ヤンはまた一つ知った。
皆が憧れ崇(あが)める蒼の妖精の里だって、同じように災厄の爪に掛かっていたんだ。
同じなんだ。能力に楽している訳じゃない。皆、それぞれに一生懸命日々を紡いでいるんだ。

夜闇が幸いだった。風露の谷の僅かな灯を頼りに、フウリの

いる塔に音をさせずに降下した。
そっと居所(きょしょ)の窓に寄る。ここもまだ明かりが灯っていた。藁灰を前にした気分でそろそろと窓から目を出すと、いきなりフウリが目前にいた。
「ひゃっ」
驚いて尻餅を付いたのは二人の少年の方だった。
「千客万来ですね…」
紫の髪を珠子の紐で結った色白の女性は、呆れた笑みを浮かべて戸口に移動した。上半身がそっくり返ってえっちらおっちらしている。本当に臨月間近いんだ。

招き入れられた室内は楽器の部品が並べられ、テーブルにはお茶のカップがあった。二人は小さな椅子を勧められ、フウリは窓際の寝台によっこらしょと腰掛けた。
「あ、あの…」
椅子に座る前にヤンが切り出したが、先にフウリが喋った。
「ああ、フウヤがお世話になっているんですってね。本当にありがとう。あの子、利かん気が強いでしょ」
「え、いえ、そんな事ないです。僕、フウヤに会えていい事ばっかりです」
「本当に?」

フウリは目を細めて、こぼれるように嬉しげな顔になった。その顔を見て、フウヤがこのヒトを求めているのが分かる気がした。
「あの、でも、えと……最近、ホームシックが酷いんだって」
ユゥジーンがしどもどと口を挟んだ。
「そ、そう、で、綺麗なお姉ちゃんの姿でも見られれば治まるかなって」
ヤンも慌てて同調した。
「だからその……リリの、人形があったでしょう?」
キョドりながら言葉を繕う二人に、フウリは背中を向けてお茶を入れ出した。
「ありませんよ、もう。あの人形は」
「ええっ」
「ああ、新しいカップが無いわ。ナーガ殿の使ったのでいいかしら?」
「えっ、えっ? えっ?」
「えええっ?」
二人は飛び上がった。
「ナーガ様、来たんですか?!」
「昼間の内に。貴方達と同じような事を言って、人形を貸してくれって」

フウリはお茶の盆を持って振り向いた。シレッとした顔だ。
「じゃ、じゃあ、人形はナーガ様に渡したんですか?」
なら、さっき会った時、言ってくれればいいのに…。
「いいえ」
フウリは更にシレッと二人の前にお茶を運んだ。
ユゥジーンが素早く立って、盆を受け取った。
「あら、ありがとう。ナーガ殿が来る少し前に、あの方が来たの。えっと、山猫みたいに目付きの悪い…」
「カワセミさんですか?!」
少年二人同時に声を上げて、フウリは吹き出した。
「そうそう、その方がね、ヘタレのフウヤが怪我をした、とっとと治って貰わんと困るから、励ましの言葉を頼むって。強引に人形を目の前に突き付けて、あっと言う間に飛び立って行かれたわ」
「……」
「その少し後、ナーガ殿が来たの。出先で鷹の手紙を受け取ったとかで、息せききって。カワセミ様の事を話したら、狐につままれたような顔をしてらしたわ」
「……」
「フウヤの怪我は、酷いんですか?」
フウリは芯の通った声で凛と聞いた。
「……はい…」
嘘なんか付けっこない。
「でも、絶対治ります。三峰には名医がいるし……フウヤはあんな怪我になんか負けっこない」
「そう……」
少し時間を掛けて、フウリは色んな思いを呑み込んだ。
そして、カンテラのオレンジに照らされて、静かに微笑みながら、二人に近付いて手を取った。
「皆がこんなにフウヤを愛してくれている。私、感謝で一杯だわ。本当にありがとうね」

＊＊＊

フウリに見送られて、二人は手を振りながら上昇した。
相変わらずの闇夜で、ヤンもユゥジーンも疲れてヘトヘトだけれど、心には暖かい陽が射していた。
「あんな綺麗で優しいお姉ちゃんだったら、僕だって寝言で呼んじゃうよ」
「懸想(けそう)すんなよ。ナーガ様の奥方なんだからね」
「いいなあ…、上手くやったな、ナーガさん」
「それはどうも」
二人は電気が流れたみたいに飛び上がり、恐る恐る上を見た。

漆黒の空から、ナーガの深緑の馬がゆっくり降りて来る。
「ナ、ナーガ様…」
「あのっ！　僕が無理に頼んだんです」
「いえっ、俺が言い出したんですっ」
あわてふためく二人を、ナーガは無言でじっと見つめた。
「あのっあのあのあの……」
「あ…あうう……」
ストレートに叱られた方がずっと楽だ。
「ご、ごめんなさい…」
「すみませんでした…」

「……何が悪かったか、分かるかい？」
やっとナーガが喋ってくれた。ゆっくり、優しい声だった。
「えと……大事にしなきゃいけないフウリさんに、余計な心配かけそうになりました…」
「蒼の里の大人の人達が決定した理由も深く考えないで、突っ走りました…」
「うん、怒り心頭のホルズをシドが必死に取り成してくれた。帰ったらお礼を言っておくんだよ」
「はい…」
「後は？」
「えと……」
「馬をいじめ過ぎ。昼間も働いたのに、こんな闇夜を二人乗りで風露と往復なんて」
「は…い…すみません…」
「帰りは僕が乗せて行く。ヤン、こちらへおいで」
「は、はい」
ヤンは緊張してカチンコチンでナーガの馬に乗り移った。ユウジーンの馬より大分大きくて、歩幅も乗り心地も全然違う。

飛び始めて少しして、ナーガは小さく囁いた。
「ヤン…、君には幾ら感謝しても足りない。義弟(おとうと)を…フウヤを、ありがとう。僕だったら、あの子にこんなに多くを与えてあげられなかった」
「えっ?!」
背中しか見えないから表情が分からないけれど、さっきとは打って変わって、力の抜けた素の声だった。
「まさか!!」
ヤンは小刻みに首を振った。
「僕が何度もフウヤに助けられたんです。なのに酷い目に遭わせてしまった」
「ううん…」

ナーガの背中は優しく語りかけた。
「フウヤはね、自分の居場所を求めて僕の元から飛び出した。そして、自分の全て掛けて守りたい居場所に辿り着いたんだ。あの子は幸せだよ」
「…?…あの…」
「イフルートってヒトに、フウヤの怪我の事情を聞いた。彼は恐縮していたけれど、こちらだって同じ気持ちだ。フウヤがそんな事をしでかす位、部落全体で大事にしてくれていたんだなって…」
「?!!　行ったんですか、三峰！　いつの間に?」
「うん、カワセミ殿の後にね。彼はもういなかったけれど」
まさか?　空を飛ぶシドだって丸一日かかるのに?　…でも、この凄そうな馬なら、有り得るのか?

「彼の届けた人形が、枕元の鏡の中でずっと喋っていたよ。フウヤ、その声を聞いて、いっぺんに目を覚ましたって。僕が行った時は、鏡の中のフウリを眺めながらスープを飲んでた」
「ほっ本当ですか?!」
ヤンが思わずしがみ着いたので、ナーガは息が詰まって咳き込んだ。
「あっ、ごめんなさい」

「いや……さすが狩猟の民だな。大した腕力だ、ははは」
数分前に後ろに乗った時の緊張が嘘みたいに、ナーガの真っ直ぐな背中が暖かく感じた。
「それと、僕が三峰に行ったの、みんなに内緒な。ノスリがフォローしてくれたけれど、僕も、仕事に穴開けちゃったんだ」
「え…あ…」
「長としての手前…ね…、言えないだろ?」
「はあ…」
「鷹の手紙、受け取って、血の気が引いてさ。そんなに上の空なら行って来いってノスリに怒鳴られて。修行が足りないね、僕も」
ヤンは言葉が出なかった。色んな思いで一杯だった。
「あの……」
「ん?」
「ヒト買いと間違えてごめんなさい」
「ああ、ははは」
背中は暖かく笑って、ちょっと間をおいて話し出した。
「あの子はね、本当は赤ん坊の時に、既にヒト買いにやられるような運命だったんだ。それを、そう…今のフウヤと同じ位の歳だったフウリが、『私が面倒見るから』って抱えて離さなくて、周りの大人が折れて、風露の子になったんだ。だから、フ

ウヤにとってフウリは、母親以上の存在なのさ」
「…!!…」
いっぺんに色んな事を理解した。どうしてうわ言で呼ぶ位のお姉ちゃんの元を飛び出したのか。『お姉ちゃん』の夫となったナーガの元に居たくなかった理由……。
「明日、三峰まで送るからね。仕事が終わってからだから夜になっちゃうけれど」
「はい、ありがとうございます。あっ?」
「どうしたの?」
「昼間三峰に飛ぶ時、僕も連れてってくれれば、ナーガさん、明日も往復せずに済んだのに?」
「ああ、うん、それも考えたけれど…」
「…?」
「君、ユゥジーンに会いたいかなあって思って」
「・・・・」
「ユゥジーンも君に会ったら喜ぶだろうなあって。砂漠から帰って君達の話ばっかりするんだよ、あの子。あ、ユゥジーンにフウヤのした事、話してやってくれ。彼にはきっと得るものがある」
「…はい……あの…」
「ん?」
「いえ、あの、ありがとうございます」
ヤンはまた一つ知った。
その部族にはその部族の定石(セオリー)があるんだろうが…。もっともっと深い所、根ッコの部分。それはきっと、どこの部族でもおんなじなんだ……。

## ～お墓～

真っ暗な中に、幾筋もの冷たい光が反射する。
(あれ? 僕、三峰の部落を出て……えーと、そうだ、蒼の里に辿り着いたんだった……)
ソラのベッドで寝ている筈? これは夢なんだ…。ヤンはもうろうと自覚した。憧れの蒼の里で一晩過ごして、神経が昂(たかぶ)っているんだろうか?
光の筋を反射させているのは、どうやら鏡みたいな物だ。数え切れない鏡がトンネルみたいにずっと奥まで続いている。
トンネルの中ほどに人影があった。ヤンは目の焦点を合わせた。夢の中でも目がいいのは効くみたいだ。
空色の長い髪がなびく、透けるように白い女性。白サギみたいな真っ白な羽根を背負っている。綺麗だなあ……。

「あっ?!」
いきなり女性の足元の鏡が割れた。
連鎖するように次々鏡が割れ、女性はあっという間に、真っ暗な奈落へ落ちて見えなくなった。
空間に漂う白い羽毛を茫然と眺めているヤンの真横を、何かが凄い速さで通過した。
白蓬の馬！　背にシンリィ…！
両手を伸ばして、さっき女のヒトが吸い込まれた闇へ向かって、矢のように飛び込んで行った。
「シンリィ！」
ヤンは激しい胸騒ぎを覚えた。

ハッと目を開けると、シンとしたパォの天井が見えた。
三つのベッドが壁際にコの字型に並んでいるのだが、頭の向こうのユゥジーンが半身起こしているのが分かった。
「ユゥジーン…?」
ヤンは、シドを起こさぬよう、小さい声で呼んだ。
「見た…?」
「ああ……」
薄闇の向こうから押し殺した返事が返って来た。
「白い羽根の女のヒトが真っ暗な中に落ちてった。それを追い掛けるシンリィ…」
「……同じだ」
「……」
偶然同じ夢を見る訳ない。ヤンが何か言い掛けた時、ユゥジーンが素早く横になって毛布を被った。
「シッ」
戸口に気配がして、誰かがそおっと入って来た。
長い髪のナーガだ。二人の方をちらと見てから、戸口の横のシドのベッドに近付く。
「シド…、シド…」
少年二人は起こさず、シドにだけ話がある風だ。
「……ん、ナーガ様…?」
シドは寝起きで驚いたようだが、すぐに察して小声になった。
「どうしたんですか?」
「ん、僕は急遽行かなければならない用事が出来た。すまないが、明日、ヤンを故郷へ送ってやってくれ」
「…?…はい、いいですけれど……どうしたんです?」
「まあ…大した事ない。ヤンを頼むな」
「はあ…」
「あと、これは僕の個人的アドバイス。想いビトに相手がいるのが分かっていても、当たって砕けた方が、人生、後悔せずに

済む」
「…??…何処へ……行くんです?」
「大した事ない…」

ナーガは音もさせずに素早く出て行った。
シドはベッドに半身起こして少しの間茫然としていたが、すぐ上着を羽織って、外へ飛び出して行った。
残ったユウジーンとヤンは、そっと起き出して、顔を見合わせた。
二人が外へ出ると、まだ群青の夜明け前で、里は眠りの中だった。しかし坂の上の執務室には明かりが灯っている。
少年二人は忍び足で窓の下に擦り寄った。ノスリにホルズ、それにシドの声が聞こえる。ナーガはもういないようだ。
「あの灰色の渦巻きですか?! 何なんです、あれは! いい加減、僕にも教えて下さい」
珍しく高ぶったシドの声だ。
「親父、シドの言う通りだ。俺達も知って置くべきだと思うよ」
ホルズの声。
「僕は、ナーガ様を信頼しているから、秘密があっても着いて行くつもりです。でも、やっぱり知って置かないと、いざと言う時、判断を誤るかもしれません」
もっともなシドの意見に、外の二人も頷(うなず)いた。
皆で立ち向かわねばならないというのに、ノスリさんは何を隠しているのだろう? ヤンは不思議でもどかしかった。
「分かった」
ノスリの苦しさを滲(にじ)ませた声がした。
「お前達の気持ちは分かった。しかし、やはり言えないのだ」
「親父?!」
「ノスリ様!!」
「禁忌なんだ。本当は俺ですら知るべきではなかった」
「長の親父が?」
「お前の母親…フィフィは、知ってしまったが為に、一度命を落としかけた」
「えっ?」
「俺はそれを一生の戒めにしている。まかり間違っても、お前達をそんな目に遭わせる種は撒けん。絶対にだ!」
ノスリのガンとした声だった。
「今は大長やナーガを信じて任せていてくれ」
「……」
「・・・・」
ホルズは多分、これまでノスリと何回もこういう問答をした

のだろう。諦めた感じで大机の向こうに腰掛ける音が聞こえた。
シドも長椅子に収まったようだ。何があっても信じ続ける事が、彼のアイデンティティだ。

外の二人はまた顔を見合わせた。これ以上盗み聞きしても、今まで以上の事は聞けそうにない。
「しかし、親父、これは、どうした事だ?」
ホルズの声に、諦めて去りかけた外の二人は止まった。
「これは、カワセミの石板だろう?」
ここで、ヤンは大胆な行動に出た。
カワセミの石板って、あの大机に乗っていた緑の奴だろう。今の一瞬なら、三人の注目はそっちだ。
ヤンは窓の外に立ち上がった。案の定、三人は背を向けて机の石板に視線を落としている。
(多少遠くても読める自信がある!)
ヤンはそう思ったのだが、すぐしゃがみ込んだ。その顔は驚愕の目を見開いていた。
「ヤン…?」
いぶかるユゥジーンの身体を押して、ヤンはその場を離れた。
かなり離れて下の廐まで移動して、ヤンはやっと口を開いた。
「ね、ユゥジーン、馬を出せる?」
「え? おい、石板には何て?」
「……読めなかったんだ」
ヤンは顔色が悪い。
「どうして?」
「割れてた」
「えっ?」
「真ん中を錐(きり)で突いたみたいに、蜘蛛の巣状に、粉々に」

＊＊＊

・・・時間は、少し遡る。
風出流山の神殿。夕暮れの緩い風が吹く。
蒼の狼は神殿を離れて、雪原の端……尖った氷が積まれた小さなケルンの横に佇んでいた。
炎をまとった誇り高い獣はここに眠る。
いや、ヒトの欲望と闘争心なんて形のない物を拠り所にしていた彼は、その命を終わらせた時、形も残さなかった。
シンリィと二人、『彼』を弔い偲ぶ場所として、ここを勝手に定めただけだ。そもそもお墓ってそういうモノだろう。遺骸の有る無しは関係ないと思う…。
後ろの気配に振り返ると、そこに波紋が広がり、丸窓となった。円の向こうに、緋色の羽根の少年が現れた。
「……久し振りですね。お菓子、食べますか?」

つい、言ってしまった。もうお菓子で喜ぶ幼子でもないのに。
すぐそこにいるのに、少年の髪も衣服も水中にいるように揺らめいて、別世を感じさせる。何か渡す時に触れる手は、とても冷たい。
「そちらは、ここよりも寒いの…？」

久し振りに姿を見せてくれた少年は、硬い表情で蒼の狼を見上げて、枠の外へ姿を消した。
…と思うと、今の丸窓が消えて、離れた階段に現れた。その丸窓を少年がまた通過する。そうして何回か消えて現れて、神殿の内部に向かう。蒼の狼も後に続いた。
玄関ホールの正面から遥か奥へ伸びる氷漬けの廊下。その突き当たりの分厚い扉の向こうに、外へ出してはならないモノが封じ込められている。
少年はそちらを凝視してから、蒼の狼を振り向いた。
「ああ、また、力を増したんですね」
蒼の狼は少年の横に進み出て、静かに術を唱えた。
緩んでいた氷がミシミシと凍結する。
「教えてくれて有り難う…、シンリィ」
神殿の奥のモノが力を付け始めたのは五年前。

最初は小さく、ひっそりと…、幽かな息吹とともに、あちらの空間を通して地上に、灰色の川が流された。
カワセミが不穏に気付き、大長と共に動き出した頃には、ソレは相当に力を付けていた。
もう、トルイとイルが遭遇した生易しい亡霊とは別物だ。もっと賢く容赦なく、現実の脅威を持っている。

シンリィは一度窓を閉じて、今度は外のケルンの横に現れた。蒼の狼も神殿を出た。
ずっと早くから人知れず、亡霊の力を抑えていてくれた者。それを五年前、初めて知った。あの夜、傷付いた『彼』が突然この場所に現れた。三日月の雫のように。
邪(よこしま)の化身である炎の獣が邪に敵対する矛盾は、彼の存在そのものを傷付ける。
彼はそれを承知していた。勿論口にはしなかったが。
そうして力尽き倒れようとする直前に、自分の後釜を蒼の狼に残酷に告げて、冷ややかに笑いながらこの場所で消えた。

その『後釜』の少年は、ケルンにちょっと黙祷してから、神殿の入り口を出た所の蒼の狼を見た。はなだ色の瞳の奥に水色が揺れている。ユーフィとカワセミの綺麗な部分を併せ持って

いるのね…。
あれ以来少年は、灰色の空間の内側から神殿の奥の亡霊を抑える役割を担っている。
カワセミも、大長も、誰も交代する事が出来なかった。彼でないと、欲望渦巻く灰色の世界に居る事が出来なかったのだ。
破邪の術を教え、生きる世話を焼いて来たのは蒼の狼だ。
いつかこの子と過ごしたいと思っていたが、こんな形になるだなんて、思いもしなかった。
「有り難うね…」
もう一度呟いて、狼は神殿の階段を降りた。
自分はいつまでここを守り切れるだろう？
災厄はどうしてもやって来るのだろう。全ての事に意味があるのなら、自分はその時、この羽根でそれを防ぐ為、ここにいたのだろうか？　それは覚悟がある。
では、シンリィは？　この子は、この時の為に生まれて来たというのだろうか？　それは……あんまりだ……！
「―――!!―――」
シンリィの叫びが頭に響いた。
我に返って振り向いた目の前で階段が波打ち、柱が積み木みたいに崩れた。氷の建物の内部から爆発するように灰色の泥が噴き出し、蒼の狼を飲み込んだ。階段も玄関も砕け、白い羽根と共に氷の塊となって舞い上がった。
＊＊＊
風出流山よりより遥か北東。
モンゴル帝国の旧王都は今や隆盛の影もなく、打ち捨てられたただの廃虚。
西のこんもりした鎮守の森も、打ち捨てられていた。中央の草ぼうぼうの広場に、二つの影がある。
「もう死んじまったのかな、この木…」
中央広場の蜜柑の大木のてっぺんで、カワセミは黒く干からびた枝々を見下ろした。
かってここから、笑いながら蜜柑を摘む巻き髪の妖精を眺めていた。そうだ、流星群の夜、大人びた彼女の手を取ったのも、ここだった。
「カワセミ、こちらをごらんなさい」
地上から大長に呼ばれて、想い出の世界から引き戻された。
「ナーガの植えた若木です。陽当たりも大してよくないのに、こんなに頑張って伸びていますよ」
「うん…」
カワセミは枝をバウンドさせて飛び降りた。
広場の端に細い若木が一人前に葉を広げていた。

「実を付けるのはまだまだだね」
やがて老木は倒れ、若い木の糧となるのだろう。
「死に行く木の時間はあっという間なのに、若い木の成長は凄く遅く感じる」
「この木が一人前になる頃には、てっぺんに立ってこう言っていますよ。『子供の成長なんてあっという間だね』って」
「そうかな……だといいな…」

「フウヤ、大した事にならなくてよかったですね」
「うん……」
カワセミはその事については言葉少なかった。
自分が至らない為、三峰を歪みの餌食にしてしまい、フウヤをあんな目に遭わせたと思っているのだ。
そんな事はない…って言葉は、彼には余りに薄っぺらい。いつもいつも、抱え込み過ぎるのだ、この水色の妖精は。
木から離れて、カワセミは森の中へ歩いて、ある一点で屈んで地面に手を当てた。地の記憶を読んでいるらしい。
「何が見えますか?」
「うん、巫女……うんと子供の」
「……」
「羽根を埋めてる。干からびた蒼い羽根。その上にカタカゴの花を植えてる。羽根の、お墓なんだね、ここ……」
「……」
「前に偶然見付けた。この地上にある、ボクの気に入りの記憶の一つ」
「そうですか…」
「大分、薄くなっちゃってるけどね…」
立ち上がって手の土を払って、カワセミはサラッと言った。
「行きましょう、大長」

三峰のフウヤの所から戻って、カワセミが急に鎮守の森へ寄りたいって言い出した時、こうなる気がしていた。
行く…、即ち、この闘いの終止符を打ちに。
もう、そうしなければならないんだろう。
闘う相手……全ての風の発祥の地、風出流山の神殿の奥底に巣食うモノ…。自分達と血を同じくする、本来なら闘ってはならない相手。
自分達が蒼の里から分断しているのは、里に累(るい)を及ぼさぬ為に…だ。同族の争いは理(ことわり)を外す。

それぞれの馬に乗って上昇しかけた時、辺りが急に暗くなり、二人はハッと空を見上げた。

灰色の渦が、意思があるように気配もなく忍び寄っていたのだ。狙いは明らかに自分達。
「向こうも本気で喧嘩を売る気になったって事ですね。しかし今はシンリィがいない。余計な消耗をする事はありません。引きましょう」
大長は逃げる体勢を取ったが、カワセミは動かなかった。
「カワセミ?」
「この森を、・・・汚(けが)すな・・・!!」
怒りに震える骨ばった手が、頭上に緑の槍を作る。
「カワセミ、引くんです!」
濁流が滝のように一気に襲って来た。
大長は寸での所で夏草色の馬の手綱を引っ張って、二頭で渦の中を脱け出した。
「カワセミ…カワセミ、今は無理です! フウヤにありったけの術を使って来た所でしょう!」
「やめろ…!」
大長の声が耳に入っていない感じで、彼は両手で額を覆って、叫んだ。
「これ以上! 汚すな! ボクの、愛した・・・・」
指の隙間から覗く隈取りの目は大きく見開かれ、見えざる者に対して慄(おのの)いている。渦の中から、自分のマボロシを連れて来てしまったんだ。
マボロシは本人にしか見えない。長く生きた者程……長く闘って来た者程、マボロシは恐ろしい。この水色の妖精は、それだけの澱(おり)を蓄積して生きて来たのだ。
「・・け・が・す・な・・・・・!!!!」
カワセミは両手で額を覆ったまま、失速した馬と共に、渦の中へ堕ちて行った。

「――カワセミ――――!!」
大長は追い掛けて濁流に飛び込もうとした。
その時、正面にいきなり紫の髪の女の子が出現した。
「じじさま!!」
真っ青な顔のリリだ。
「シンリィが!!」
「どうしたんです?!」
「お山の神殿が、いきなり、どかあんって! んで、シンリィが飛び込んで!」
「…!! 妹は? 白い羽根の女性がいたでしょう?!」
「そう、そのヒトが氷の塊と一緒に地面の底へ墜っこちて……あた、あたし…、怖くて、足がすくんじゃって…」
「何てこった…」

さすがの大長も、重なった大事に動揺した。
「リリ、前に乗りなさい。シンリィのいなくなった地点に案内して！」
「かーたんは？　どこ…？」
「カワセミは……大丈夫、私の自慢の息子です」
＊＊＊
蒼の里の厩。
執務室の面々に気付かれぬよう、ユゥジーンはそっと馬を引き出して、ヤンに聞いた。
「何処へ行くの？」
「すぐそこのハイマツに覆われた丘」
「ああ、あそこ？　なんでまた？」
ユゥジーンは訝(いぶか)りながらも、言う通りに馬を飛ばせてくれた。蒼の里と目鼻の先のハイマツの丘へは、一回のジャンプで到達した。
「ああっ、やっぱり…!!」
上空から暗い地上を見て、ヤンが叫んだ。
「ん？　どこ？　……あっ」
ユゥジーンにも程なく見えた。
ハイマツの丘のてっぺん近く、昨日と同じ場所に、水色の妖精がうつ伏せにうずくまっていた。
緑の石板が割れていた。このヒトに何かあったんだと思った。そして、何故だかこのヒトは、休みたい時にここに来るんだ。
二人は駆け寄ろうとしたが、ユゥジーンは慌ててヤンの肘を引っ張った。
「駄目だ!!」
カワセミの周囲に灰色の歪みが、大蛇が締め上げるようにうねっていたのだ。
「カ、カワセミさん!!」
ゆっくりうねる渦の中で、水色の妖精はゆるゆると立ち上がった。俯(うつむ)いているので表情が見えない。顔を覆った髪の下の口は、何かブツブツ呟いていた。
茫然と突っ立っている少年達に向いて、カワセミはやにわに両手を頭上に挙げた。手の中に緑の槍が出来上がって行く。切っ先が……ヤンの首に向いていた。
「う、嘘でしょ……？」
恐怖で硬直した。槍より何より、尊敬していたヒトが刃(やいば)を向けて来る事実が恐ろしい。
カワセミの薄い唇から絞り出すような言葉が洩れた。
「…何で、羽根を欲しガル……なンデ…？　ボクのしたコト、無駄だったノカ…？」

「……」
ヤンは槍の切っ先を見つめて、震える声で呟いた。
「ごめんなさい……そうだよね、傷付くよね……」
蒼の妖精の凄そうなヒト達だって、自分達と同じ……苦しんで、悩んで、傷付くんだ。ヤンはそれを知ったばかりだった。
「無駄だっタ……もう疲レタ……どっちみち、ユユはもういないんダ……この世界のどこにも……ユユ……ユユ……」
槍は、持つ人の苦しみを吸い込むように、光を増していく。
「逃げろ！　ヤン!!」
「カワセミさん!!」
ヤンは足をガクガクさせながらもそこに踏みとどまって、必死で声を出した。ここで挫けたらフウヤに叱られる！
「貴方に救われた命だもの！　貴方の為に使う!!」
両手を伸ばして槍の切っ先を掴む。
「ヤ、ヤン…!!」
ユゥジーンは息を呑み込んで一歩も動けない。
ヤンの両手が焼けた炭を掴んだみたいにギリギリ痛んだ。身体全体が振り回されるみたいだ。恐い…恐いけど、離さない…！
目の前のカワセミは無表情で槍を構えているが、ヤンの瞳には、泣きそうに震えているカワセミが映った。
「ねえ！　無駄じゃないよ！　全然無駄じゃない。僕を見てよ！　貴方が助けてよかったと思える者になるよ！　お願いだから、一緒に未来に向いて!!」
「・・・・・」
槍の振動が止まり、カワセミも止まった。
「ボク・・ボク・・・は・・・」
その時、ヤンの目の前を、巨大な背中が覆った。
「?!」
ノスリが大きな手でカワセミの両手を掴んでいた。
「このウスラトンカチ!!　しっかりせんか!!」
言うが早いか、グローブみたいな平手で、彼のこけた頬を、往復はたいた。
――　パシパシ!!　――
二人の少年の方が、痛そうに目を瞑(つむ)った。
素手ではたいただけなのに、カワセミに絡んでいた灰色の大蛇が、一気に消し飛んだ
「ふぇ……」
カワセミは脱力して、前のめりに崩れた。
ノスリが太い右腕で受け止める。腕の中に相棒をがっしり抱え込んで、そして、前を向いたまま言った。

「…長い間、ご苦労だったな。少し休め」
「……ノスリ…」
カワセミの声は正気を取り戻していた。
「十三年間張り詰めていたんだ。お前は限界だ。俺には判る」
「……ノスリ…でも、災厄が本気になって……大長が一人なんだ！　行かなくっちゃ！」

「俺が行きます!!」
叫んでからユゥジーンは全身が粟立った。
「僕も行く!!」
ヤンも間髪置かずに叫んだ。
ノスリさんの言う通り、このヒトは体力的にも精神的にも限界が来ているんだ。だって、そうでなかったら、あんなマボロシなんかに捕まる訳がない。
もう……このヒトに頼っちゃ駄目だ！。
「お前ら…」
呆れ顔のノスリの手を離れて、水色の妖精はフラフラと二人に近付いた。またヒヨッコの癖にどーたらとか言われるのか？
「頼む…」
「えっ?!」
「へっ?!」

「おい！」
カワセミがスウッと上げた手に、天空から夏草色の馬が降って来た。
「風出流山の神殿だ。こいつが場所を知っている」
「お、おい、カワセミ!!」
「ノスリィ…、大丈夫だよ…」
「……」

ヤンはノスリに止められない内にと、慌てて大きな夏草色の馬によじ登った。両手はまだビリビリするけれど、肉体の傷にはなっていない…、大丈夫だ！
「ノスリ様！」
ユゥジーンも興奮する自分の馬に飛び乗りながら叫んだ。
「今、分かりました。ノスリ様が、どんだけ言えないかって。自分の親友がこんなになるまで闘っているのに、言えない。それは本当の本当に言っちゃイケナイからなんだ…って、分かりました！　だから俺、これから行く場所で何を知っても、忘れます！」
「…ユゥジーン」
「僕も、ユゥジーンと一緒です！」
ヤンも手綱を手繰りながら叫んだ。

「……よし…!!」
ノスリは意を決した。
「その馬はハンパないぞ、ヤン。死んでもタテガミを離すな！ユゥジーンは死ぬ気で着いて行け！」
「はい!!」
「…はい!!」
「――行け!!――」
カワセミが叫ぶが早いか、夏草色の馬は打ち上げ花火のように垂直に飛び上がった。ユゥジーンも泡食って着いて行った。
「……あいつ、ムチ打ちにならんかったろうな……」
玉砂利の上で、残った二人は、北へ飛び去る流星を見やりながら座り込んだ。
「はぁ…、ボクも、最初はよくやった」
「お前な！」
「…眠い……」
水色の妖精は、地面にゴロンと転がった。
「…里へ来て休むか？　エノシラに話して、あの生命の流れの場所を開けて貰おうか？」
「…いい…、回復したらすぐ行かなくちゃ。ノスリの馬を貸して。頑張ればジェット気流に乗れると思う…。取り敢えず……今は…寝る……後は…宜しく……」
「おい、こら。俺はこれでも忙しいんだ」
「・・・だから、ボク、キミがイナイト・・・・」
水色の妖精はコトリとスイッチが切れて、石のように眠ってしまった。こうなったらテコでも起きない事は、昔っから知っている。
ノスリは溜め息付いて、上着を脱いで、無防備に寝入る相棒に掛けてやった。後でホルズに文句言われよう。
こいつは魔力が強いから凄いヒトに思われがちだが、精神(こころ)はいつも拠り所を求めている。本当に疲れてどうしようもなくなった時は……独りでここへ逃げて来るんだ……。
ここの地面には、多分、こいつの一番大切な地の記憶がある。
長い眠りから覚めて、寂しさと喪失感に暮れている時……、命輝く巻き髪の女の子に出逢った、淡い光のような記憶…。

〜Ⅵへ〜